

石川県内中学で唯一の硬式野球部 ボーイズリーグに加盟、全国に挑む

少年野球を始めた小学生が進学する中学校の多くに、軟式野球部があります。しかし近年、さまざまな規制により、十分な練習ができないケースが出てきています。本校では、石川県内の中学校で唯一の硬式野球部として、公益財団法人日本少年野球連盟（通称：ボーイズリーグ）に加盟し、両翼100mの人工芝球場で、好きな野球に思いっきり打ち込むことができるのです。



現在、高校・大学・社会人、そしてプロ野球では、硬式球を使用しています。今、プロ野球で活躍している選手たちの大半は、ボーイズリーグの出身者です。中学時代から硬式球で練習を重ねれば、高校入学時に実感するギャップもなく、高いレベルの技術や戦術を身に付けていくことが可能です。特に、中学時代から硬式球で練習することにより、バッティングの技術力に大きな差が出ると言われています。

中学時代は、体格的にも子どもから大人への大事な成長期であり、体力づくりに励み、野球の基礎を徹底的に習得することが重要です。本学園のグラウンドがボーイズリーグのメイン球場と位置付けられれば、全国から強豪チームが練習試合に訪れる見通しであり、チームも個人も強くなるための環境と指導陣がそろいます。

チームポリシー *policy*

1. 人間力の向上なくして競技力の向上なし
野球の能力だけではなく、社会人として必要な礼儀やマナーの大切さを身につけ、“応援されるチーム・生徒”を目指します。
2. 文武両道
学校での勉強と、部活動の両立を目指します。
3. 金沢学院大学・高校との交流
中学段階から高校生や大学生のレベルの高いプレーを、自分の目で見て体験できることはとても大きな意味があります。定期的に合同練習をしていきます。

NEWS

人工芝の球場が 2022年度完成の予定

金沢学院大学附属中学校の南側の場所で現在、人工芝の野球場建設計画が進められています。計画では、両翼100m。ベース周りやマウンド付近のみが土で、残りのスペースはすべて人工芝で、夜間照明付き。2022年度完成を目指しています。

指導者の胸の内

パワーやスピードはトレーニング次第



私は高校時代、主将として春夏連続甲子園出場を果たしました。そこで感じたのは、全国の強豪校の選手たちと自分たちとの体格差による、パワーやスピードの圧倒的な違いでした。すなわち、全国と自分たちとの「トレーニング・体づくりの差」なのでした。この経験から、私はトレーニングの理論・手法などを専門的に学び、母校に戻ってからは野球部員一人一人の体力レベルを通常の2～3倍に引き上げることに専心し、26年間で春夏合わせ13回、野球部を甲子園に導いてきました。中学生部員には野球の技術的・戦術的な指導はもちろん、まず食育トレーニングで体を大きくし、さまざまなトレーニングで身体能力を大きく改善して、一流選手の土台となる体づくりをしていきます。

岩井 大 監督

金沢高校、日本体育大学卒。1992年から金沢高校野球部を指導。部長時代には石川県高野連副理事長を務める。

一番の思い出

1987年の夏の甲子園開会式で選手宣誓をしたことですね。実は、この予選となる石川県大会でも選手宣誓をしており、ぜひ、甲子園でもと本気で願っていました。私たちの時代は試合日や相手を決める抽選会で、まず抽選する順番を決める予備抽選で1番くじを引いた主将が選手宣誓をするルールでしたから、私自身、この予備抽選に一番力が入っていました。今でも1番くじを引いた瞬間は、昨日のこのように鮮明に覚えています。

練習場所

金沢学院大学附属中学校近くで新たに建設される人工芝グラウンドを拠点に荒天時は大学、高校の屋内施設を利用します。

活動予定

平日は授業終了後、原則15:30～19:00の3時間半。試合・実戦練習日は土・日曜に組み、休息日・ノースローデーを週に1日必ず設けます。

信頼の指導者たち *coaching staff*



投手コーチ 梅田 英範

金沢市出身。石川県立金沢商業高校、金沢学院大学、西濃運輸で主戦投手を務め、高校時代は北信越大会、大学時代は明治神宮大会、社会人時代は都市対抗、日本選手権に出場。現在、金沢学院大学職員。



トレーナー 田嶋 弘和

加賀市出身。SCC北陸(ストレンクス&コンディショニングクラブ)代表。プロ野球、社会人野球選手らスポーツ選手のトレーナーを30年余り務める。